

校正ノート

No.16
2016.2

晃南印刷株式会社
プリプレス部
校正担当／中里（内線301）
制作／竹沢（内線305）

ありがとう
80周年に感謝



文芸の基本形

俳句の会、短歌の会等、同好の人達が集って作品を発表、講評を披露なされている会がある。その場に配布されるテキストの校正をすることが毎月定期である。ご年輩の方々が多いこともあって、手書きの原稿を読むのは、お人柄を感じたり、情景の描写に「なるほど、見事な表現だなあ」と思うこともあり、楽しみな校正作業の一つであるが、時に達筆すぎて判読できない文字がある。その際、それぞれの基本の型＝文字数から類推するようにしている。

俳句・川柳は、五・七・五の十七文字。

俳句と川柳の違いは、

- ◆俳句 季語が必要、切れ字がある、主に文語表現。「古池や蛙飛びこむ水の音」で言えば「蛙」が春の季語、「や」が切れ字
- ◆切れ字 一句として完結させるため言い切りの形にする語。「かな・けり・や・らん・もがな」等、主要な切れ字を切字十八字という。
- ◆川柳 季語・切れ字にこだわらない、主に口語表現。



短歌は、五・七・五・七・七の三十一文字。

同型の和歌との違い

和歌は、中国の漢詩に対する語で、やまとうた=日本の詩歌全体を指していたが、平安朝は特に短歌形式の歌をいうようになった。短歌は、奈良時代は長歌(=五・七を制限なしに連ねていき、五・七・七で終わる形式)に対する語、明治時代の短歌改革からは現代に繋がる語となった。表記は、句読点を付けず一行に続けるが、石川啄木は、句読点を付け、三行に分かち書きしている。三行詩と称する。



しもつかれの語源

栃木県の郷土料理。鮭の頭、大豆、鬼おろしでおろした大根・人参等を酒粕と共に煮込んだ栄養豊富な保存食。初午(2月で最初の午の日、今年は2月6日)の日に稻荷神社に赤飯と共に供えられる。地域により、しもつかり、しみつかり、しみつかれ、すみつかれ、すみつかりとも。語源には諸説あり、

- 「しみつかる」 = 「味がしみこんだ料理」「冷たい料理」から
- 「酢むつかり」 = 酢をかけて食べたから(『宇治拾遺物語』に見える)
- 「下野ばかり」「下野家例」の訛り 等
- 「三軒(七軒とも)の家でしもつかれを食べると中気にならない」という言い伝えがある。



同音異義語・同訓異義語の使い分け、似た言葉で間違いややすい使い方等、校正中これでいいのかともやもやした気持で仕事を進めると後味が悪い。調べると宙に舞っていた言葉の意味がひらりと掌に落ちて、すっきりする。

言の葉
ひらり

最後と最期

最後…最も後であること。最終。終末。対義語

最初/臨終。死。

最期…いまわのきわ。命の終わる時。死にぎわ。

臨終。

最後も臨終を意味するが、最期は命の終わりの意味だけに用いる。

一堂に会する

多くの人が目的をもって一つの場所に集まることがあるが、「一同に(全員がいっしょに)」と間違えやすい。



2月歳時記

- 3日(水) 節分 立春の前に邪気を祓うため、豆をまく
- 4日(木) 立春 「寒中見舞い」は立春の前日まで。以降は「余寒見舞い」
- 11日(木) 建国記念の日 紀元節から改正、1967年適用
- 12日(金) 菜の花忌：司馬遼太郎 物語に隨筆の手法を盛り込む文体を確立
- 19日(金) 雨水 二十四節気の一。雪から雨に変わり、草木が芽生える頃
- 22日(月) 風生忌：富安風生 温和な句風。「秋晴の運動会をしてゐるよ」

豆のまき方

炒った豆を使い、夜にまく。まくのは、一家の主。窓を開けて「鬼は外」と唱えて外に向かって2回まき、すぐに窓を閉めて「福は内」と唱えて部屋の中に2回まく。奥の部屋から、最後に玄関。

竹沢メモ

子供の頃、節分の日に父親が鬼役をして、よく豆をぶつけたものです。「鬼は外！福は内！」と豆をまき、年の数より少し多めに豆を食べていました。次の日も床に落ちている豆を見つけてはこっそり食べていました。そんな事今ではとてもできません。今年は久しぶりに豆まきをし、春を迎えようと思います。